

ナホトカで船に乗ったときに、港の中はよかったんですけれども、一歩外に出たときには物すごく風があつて、大きな波の中を船に乗ってきたわけです。それで、船の中ではもうみなおびてしまつて、酔うて、もう話をするどころの騒ぎではなかつたわけです。それで、どれだけの風があつたかという、あとから聞いた話ですけれども、ナホトカから舞鶴に着く所要時間の半分近く早く着いたんです。それだけ風があつて、船の中の状況というのはみな話をする状態ではなかつたわけ。それで、やっとこさ舞鶴に着いて、ひょっと見たら緑色の山が見えるわけです。そのときのうれしさはもうたまらなかつたです。

—— どうも長い時間ありがとうございました。

痛恨シベリア抑留

石川県 永井正三

—— これからの人は、ダモイということで汽車に乗

せられたわけですね。それで、それは内地へ帰れると思つて信じていたけれども、着いた先がシベリアだった。その間の心境をもうちょっと詳しく話してほしいんです。

私は、昭和十六年七月の関東演で二度目の召集を受けまして、牡丹江の第九師団歩兵第七連隊へ再び入隊いたしました。牡丹江には終戦まである特別の勤務でおりまして、自分の原隊は沖縄へ行つて、それから終戦を台湾で迎えて、事なきを得て皆さんは帰ってきたんですが、私一人牡丹江へ残りまして、日本人の中学校の教師に部隊から派遣されて、軍服のままで応召されました。

関東軍の将校の子弟をあずかる中学で、終戦のときに牡丹江から逃げまして、通化にさがっておりまして関東軍司令部へ逃げ込みまして、とりあえず司令部付きになり、終戦後参謀長が通化で山のような書類を焼いているのを目撃いたしました。新京で一か月軟禁されまして、それから千人単位の部隊に編入されました。見も知らない新京警備部隊という臨時の部隊にたった一人で編入されまして非常に困りました。これがまた八月一日に召集

された地方人の年寄りの兵隊ばかりで、とんでもない部隊でありました。出発経路は、新京で大隊が編成されまして、二個大隊二千人が乗車いたしましたので、そのまま北へ北へ、新京、ハルビン、北安、黒河、ブラゴエと渡って、川を渡りましたときには、いよいよこれはもう当分帰れないという覚悟をいたしましたけれども、まさか二年も三年も延ばされるとは思いません。

シベリア鉄道を西へ西へと参りまして、結局三十数日かかりまして中央アジアの方へ、南へ下がりまして、ウズベック共和国のタシケントという首都におりました。そこからまた乗るかえて東へ百キロほどの二千五百メートルほどの高原にある炭鉱地にはいりました。アングレンと申します。戦前からの炭鉱地で流刑囚が大半おりました。そこでの作業で、初めは土木作業でありましたけれども、あとで聞いたところが、高原の谷間を大きな川が流れておりましたけれども、その川をせきとめて新しい川をつくれという作業であった。何でということはありませんでしたが、これが前の川の河川敷を十メートルほど土をはねると、厚さ五十メートルほどの炭層が二

十五キロにわたって埋まっているということでありました。そこへ日本人の約六個大隊、七千人近くが投入されまして、町の建設と河川工事と従来の炭鉱というように従事いたしました。高原でありますので、私は初め外の作業、道路工事とか鉄道をやっておりましたけれども、富士さんの七合目ぐらいの高さですから、時々酸欠がありまして、何もしないのにみんなぐったりして、監督にもうどなり散らされたことを覚えております。鉄道工事をやっておりますので、今覚えておりますノルマでは、枕木の取りかえが一人一日十六本でした。二人で組んで三十二本ですが、これはとてもできないことで、三十二本がずうっと並んでいればできますけれども、シベリアから送られてきた生木の枕木の集積所へ行って、それを担いで帰ってきて、それをまた古い枕木をこちらに一本、こちらに一本という、三十人ほどの作業隊が何キロにもわたって枕木の交換をするという重労働でありました。辛いシベリアと違って気候が温暖で、せいぜい寒くても零下五度から十二度ぐらい。犠牲者が少ないのは何よりの幸せでした。

一年半ぐらいいまして、日本新聞、新声明などが参りまして思想教育が始まったわけですが、若い兵隊がアクチブというので選抜されて、首都のタシケントなんかで教育されて帰ってまいりまして、習いたての教条主義の思想教育をいたしました。これには私たちも非常に困りましたので、それをゆるめるつもりで文化研究会というものをつくりまして、俳句の会だとか、それから文化講演とか、それぞれ専門家がおりますので、歴史とか経済とかいろいろな講話をいたしました。できるだけそういう社会主義の浸透を防いだわけでありまして。

先ほどお話がありましたように、この連中が、いわゆるノルマにかけられて密告をするわけです。特に私らのラーゲルには新京の憲兵隊の前歴をかくした連中がたくさんおりました。警察官もおります。将官もいまして、そういう前歴を洗って密告いたしました。ラーゲルの空気が非常にいんさんになりました。日本新聞の報道は故国の混乱だとか、米をよこせとか、非常に悪い情報ばかりを取り上げておりましたんですが、通信が許されまして、東京から来たはがきの返事にリーグ戦もおかげさま

で復活したというような、もう野球が復活したんだ、大體平常に復したんだ。こういう具體的な返事が非常にみんなを喜ばせた。総隊長代理をしております、鉄道の脱線とか転覆の修理班の班長をさせられておりまして、体を少し栄養失調で痛めまして、宮内作業に切りかわられました。劇団活動も非常に盛んになりましたので、そのマネージャーに頼まれて、これは脚本の検閲とか、歌謡曲の文句までいちいち届け出て許可を得るわけでした。昔の時代劇の立回りなんかには、かなりいちゃもんをつけられてまして、脚本を直せということがあったことを覚えております。

このアングレンという炭鉱に二十三年九月までおりまして、舞鶴へ帰りましたけれども、何分私は毎日新聞におりまして、八年ほど留守をしております、もう何か一種の記憶喪失といえますか、失語症みたいな栄養失調になりました。新聞社の上役もこれはもうものにならぬので、辞めようやないかというくらいに、ニュースに順応できませんでした。一か月ほど休暇をもらいまして、県の図書館へ通いまして、終戦からの二十三年までの新

聞を毎日少しずつくって、GHQは何だとか、ララ物
資って何のことかという言葉から少しずつ覚えて、どう
にか復職して定年までおりました。ただ、私が八年ほど
留守をしまして、子供二人を抱えた女房がすっかり体を
消耗しておりまして、それきり寝たきりの病人になりま
した。二十年近く寝込まれましたのは、これも直接の被害
ではないんですけれども、私にとっては非常につらい
思い出でございました。もうこれだけ遅れた以上は、新聞
社の出世も立身もそんなことは問題外になりました。
とにかく生きて頑張ろうということ。

記者をしておりましたので、その後シベリアの抑留者の
帰還についての情報から、記録というものには非常に関心
を持ちまして、二百冊近くの記録を集めました。

—— 帰られてから復職されるまでに、どういうんですか。

一応席がずうっとありまして、いつでも帰ってこいという
んですけれども、体がもうガリガリでしたし、ちょっと記憶喪
失みたいになっておりまして、二か月ほど田舎で、こちらの金
沢で静養して、そして、新聞を毎

日々々見て、それで二十三年十一月ごろから復職しまして、
文章が少しずつ書けるように。

—— 半年ぐらい。

そんなにもなかったです。二か月ほど休暇をもらいました。
法隆寺の大火があって、それを取材に行けというので、な
かなか言葉が出てこないで参ったことがあります。

奉天第二監獄からマルシャンスクへ

石川県 戸藤 利夫

—— 食糧のことはどなたも出てきませんけれども、
そういう点も話してください。

私は昭和十四年に満州国から金沢で鉄道警護軍の採用
でございました。石川県から六人合格しまして、昭和十四
年六月に北滿に来了。そして、奉天の北の方にあるん
ですが、北奉天の中央鉄道警護学院に入りまして、三か
月間、軍事教練と法律の方を学んだわけです。それで、